

自著と
その周辺

たこつぼ症候群 これまでの歩みと未来へのメッセージ

編集：土橋和文, 上嶋健治

克誠堂出版 242頁
2021年1月8日発行
8,000円(税別)

ISBN 978-4-7719-0540-5 C2047

たこつぼ症候群は、その名称が示すように日本発の疾患概念です。2001年に本書の編者である土橋・上嶋による J Am Coll Cardiol (以下 JACC) 論文¹⁾を機に世界的に注目される疾患となりました。現在ではスイスを中心とした登録研究；Inter TAK から多数の業績が出て、欧米発の診断基準が用いられ、研究の主体は欧米に移っています。そうした経緯を振り返り、臨床の場で遭遇する希少疾患を研究する上で初期の症例集積が重要であること、研究グループの形成、英文執筆の価値、登録研究の重要性などに触れています。日本の本症候群研究の現況が「読み物として許容」される平易な記載で「私信(思い)」を積極的に発信するような形で編集されたのが本書です。従って次世代の研究者に、多くの示唆と励ましが散りばめられています。

日本人の名を冠した循環器疾患としては川崎病と高安病がまず思い浮かぶでしょう。いずれも初期に優れた臨床家によって症例が記載され、類似症例を集積し、疾患名が様々に提起されつつ、研究者たちの議論の中で疾患概念が整理されました。そして英文に発表されることで世界的に注目を集めました。

高安大動脈炎に関しては、高安右人が第12回日本眼科学会(1908年、明治41年4月2日福岡)で、眼底に特異な花冠状吻合を呈した21歳女性例を「奇異ナル網膜中心血管ノ変化ノ一例」として報告。1948年清水健太郎・佐野圭司が「脈無し病」と命名してこの病態が血管病であることを指摘し、さらに1951年 pulseless disease として英文報告されると、外国からも症例が報告されるようになりました。1964年 Aortic arch syndrome などの命名が出る中で、信州大学旧第2病理の那須毅教授が、発症機序は炎症であるとして「閉塞性増殖性幹動脈炎」と命名したのは1963年でした。那須教授と発地雅夫教授時代を通じて本学でも熱心に研究が重ねられました。

たこつぼ症候群に関しては、1990年に広島市民病院の佐藤光によって「左室造影上「ツボ型」を示した stunned myocardium」の3例として記載されたのが世界初になります。こうした知見が集積され始めたきっかけは、急性心筋梗塞に対して1980年代後半から冠動脈内血栓溶解療法、1990年代には冠動脈形成術が実施されるようになり、本症のように胸部症状と ST 上昇が急性発症して急性冠症候群に類似した病態では、救急搬送されて緊急冠動脈造影を受ける機会が増加したためと考えられます。

我々がこうした症例に注目するようになったきっかけは、1997年3月に信州大学第3内科循環器グループの月例検討会において、一瀬博之が、胸部症状に伴って急性期 ST 上昇を示し、緊急冠動脈造影で有意狭窄なく、経過中に心筋逸脱酵素上昇なく、亜急性期に巨大陰性 T 波を呈した3例について報告したことによります。この3例は、86歳女性の急性くも膜下出血、61歳男性で飲酒後に山中で狩りをしていて発症、54歳女性は職場で口論中に発症でした。発症状況の異なる3例で、冠血流低下に起因しない心筋障害が同様の経過を取ったことが注目されました。その後グループ内で症例を集積し、同年7月に盛岡市の岩手医科大学附属循環器医療センターで開催された第19回狭心症・心筋梗塞症研究会に、「急性心筋梗塞と誤診したたこつぼ状左室を呈する症候群の4例」を報告しました。

狭心症・心筋梗塞症研究会は、1983年に国立循環器病センターCCU(平盛勝彦, 土師一夫ら)と東京女子医大・病理(金子昇ら)を中心に『心筋梗塞症における二つの細胞死の分布について』を一つのメインテーマに、心筋梗塞症の発症機序に迫り、その治療を向上させたいとして、年2回開催されていました。そこには日本の循環器病診療を牽引し多くの臨床医を育成してきた東西の両施設で働き・学んで全国に散らばる人脈が多く参加し、狭心症・心筋梗塞症の様々な病態について活発な議論が展開されていました。

我々の発表を契機に、1998年から狭心症・心筋梗塞症研究会を基盤に症例集積が2回にわたって行われ、集められた詳細な症例記載から88例をまとめた2001年土橋・上嶋らによる JACC 論文¹⁾で「たこつぼ」の名称が国際的にも認証されるに至りました

温故知新と言うほどに長い歴史ではありませんが、佐藤光の慧眼による記載から30年、土橋・上嶋らの症例集積から20年を経て、本書によって日本における本症研究を振り返り、改めて世界に伍して症例登録研究や発症機序の研究が進められることを祈念します。

1) Tsuchihashi K, Ueshima K, Uchida T, et al; Transient left ventricular apical ballooning without coronary artery stenosis: A novel heart syndrome mimicking acute myocardial infarction. JACC 38: 11-18, 2001

(川西赤十字病院 大和真史)

